

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

A Synchronic and Diachronic Study of Middles in English

論文題目 (英語における中間構文に関する共時的・通時的研究)

氏 名 馮 爽

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は(1a-b)のような典型的な中間構文と(2)のような再帰的な中間構文の統語的・意味的特徴を明らかにし、そして、これらの2種類の中間構文に通時的・共時的な分析を与えることです。

- (1) a. Dirt will rub off when it is dry.
- b. The book reads easily/ like a train.
- (2) Honda—the car that sells **ITSELF**.

論文の各章の内容を以下にまとめます。2章では、(1a-b)のような典型的な中間構文に関する先行研究(とりわけ、統語分析と語彙分析)を概観します。統語分析にとって最も厄介な問題は、中間動詞の内項はどのようにして Relativized Minimality (Rizzi (1990))に違反せずに、介在する外項を越えて主語位置へ移動することができるのか、ということです。本分析は、この問題点を解決するために、語彙分析の方針に沿って、中間動詞の外項は恣意的な意味(Arb)を持っており、そのため外項は統語構造において投射しないと

提案します。これによって、なぜ中間動詞の内項は基底位置から、Relativized Minimality に違反せず、主語位置へ移動することができるのかが説明されます。

3章では、OEDからの資料に基づいて、(1a-b)のような典型的な中間構文の通時的発達の道筋を明らかにし、その発達過程を英語史における法助動詞(特に will)の発達と T にある null modal operator の満足方法の変化(cf. Massam (1992))という観点から説明します。本調査の結果により、中間構文は16世紀に初めて出現し、そして null modal operator の満足方法は、modal (16世紀)、facility adverb (17世紀)、event adverb (18世紀) という順に拡張されてきたことを示します。さらに、その出現の理論的な分析として、will が modality を獲得したこと、modal が T 要素として再分析されたことが、能格構文が中間構文として再分析されることの引き金となったと主張します。

4節では、3節の統語的分析を拡張しながら、(2)のような再帰的な中間構文の起源及び発達について議論します。その発達過程は、英語の再帰代名詞の発達と Fiengo (1980)に基づく、当該の構文における再帰代名詞は easily のような副詞と同じであるという考えを組み合わせることで説明されます。再帰的な中間構文の起源は再帰的な能格文であり、その能格文の再分析を通じて、再帰的な中間構文は発達してきたと主張します。本調査では、コーパスと OED より得られた自動詞の再帰構文の事例を、(3)で示されるような3段階に分類します。

(3) a. reflexive ergatives

The river divided itself.

b. ambiguous reflexive ergatives

The door opens itself.

c. reflexive middles

The small riddle reads ITSELF.

調査の結果により、16世紀の後期には(3b)のような両義的な再帰能格文の例が現れ始め、それらが再帰的な能格文から再帰的な中間構文への再分析にとって重要な役割を果たしたと提案します。さらに、その出現の理論的な分析として、複合再帰代名詞が確立したこと、典型的な中間構文の出現したことが要因であると主張します。

5章では、ミニマリズムの枠組みを用いて、現代英語における中間構文と他の関連した構文の間の類似点と相違点を説明します。特に、節構造における軽動詞の機能を3つの機能範疇(即ち、FPとVoicePとvP)に分けます。機能主要部Fは[uAgree]素性を持ち、格付与の役割を果たします。主要部Voiceは外項に主題役割付与の役割を果たします。主要部vは出来事読みの解釈をもたらします。これらの機能範疇に訴えることで、当該の構文間の語順の違い及び統語的・意味的な違いは、本分析の下で説明されることを示します。

本論文は2つの面で中間構文に関する言語研究に貢献します。第一に、従来の研究とは異なり、本分析は典型的な中間構文と再帰的な中間構文は本質的には同じであると主張します。そして、生成文法の枠組みを用いて、それらの特徴を説明します。第二に、典型的な中間構文と再帰的な中間構文の歴史的発達についての先行研究はほとんどないため、本論文において初めて、それらの起源と発達過程は明示化され、その通時的統語変化は再分析に基づく簡潔な説明を与えられることとなります。この考察の結果により、それらの2つのタイプの中間構文の出現したことと複合再帰代名詞の確立したことは同時期であるのがわかります。この歴史的な考察は通時的な面で、1つ目の主張点を支持します。